

巨大鏡はどこで作られたのか

■ 平原遺跡出土の巨大な鏡「五面」は、日本

製であろう、といわれている。(既述)

■ とすれば、天日槍やその子孫達がこれらの

鏡を作ったわけではあるまい

■ 確証は無いものの、次のような経緯があっ

たのかも知れない。

(1) 箕子達が鏡を格別に重んじているので

箕子支配下の倭人達も鏡を尊ぶようになった

つた。

(2) 倭国創建当時の神璽(天表)は天羽羽矢

と曰ふが、倭人達は、日鏡を王位継承の際の

の頃から、倭人達は、日鏡を王位継承の際の

御璽(あまつり)にいたのであろう。

* 倭人達が自らの意志で神璽を変更したのか、箕子達から強制されたのかは、分からぬ。

紀上 570^P 補正 2-19 647
 あろろ であろろ 紀上 117^P

皇帝と王侯の妻

774^p - 15/16

④ 193° 15' 12" N
山中に身を隠して

① 333-12/17 未題文
 好厚前頁18斤

耳環(耳飾り)は
持参するのではない

⑤ 9738
- 11/18
1657

割竹形木棺
の中へ

(1) 王都の宮城は陥落した。
 (2) 重く嵩張る銅鏡は、持ち出せず、王宮内に取り残された。
 (3) 伊都国の裏山、背振山脈の山中へ逃げた。
 (4) そればかりの無惨な有様だった。
 (5) 右がお亡くなりになった時、天日槍らの墓制となつていた方形周溝墓の、平原一号墳などの豪華な品々を副葬した。

H 22(2010)12.29
 H 30(2018)1.15(A)~1.17(4回) 5月13日 6月13日
 和2(2020)8.13(木)~8.15(土) 前原市 平原、方形周溝墓(1号墓)
 三方形、四方形、五角形
 774 P-16/16

⑦773 免田式土器 「重弧文」 弥生人の新リ3頁2行
 7/19 ⑦675-2/3
 下
 下

下 8/15
 8/15

と想像される。

⑦

な お、

(1) 平原遺跡一号墳から出土した巨大な鏡口内

行花文鏡口の文様(厚真図版 183-7/18)

(日) 球磨地方や霧島山北麓などから多数出土す

る口免田式土器口の文様(第136図)

の二者には、かなりの類似性があるように見受けられる。

※ 双方の外表面に、単純で、きりーた同心円線

文が巡らされており、弧文が描かれている。

平原遺跡の一号墳から出土した大鏡口内行

花文鏡口(同範鏡五面)の厚真図版 ⑦73-7/19 を見る

と、中央部分に口八個口の円弧があり、隣

り合う円弧の両端は互いに接している。

・ つまり、八箇所の接点がある。

・ 鏡の中心におよび各接点とを結ぶ線分の延長線

と、鏡の外周との交点(P)は、合計八个所有ある。

・ 接点から隣接する接点へ至る鏡外周の曲線

(円弧)の長さは、約口一尺口である。

⑦

「である」としておきたい。

④ 112-9/23
 案の図三雲、甘原溪脚、
 (コウ) (コウ) 雷山川は大きな下さ。 (コウ) 雷山川は大きな下さ。 (コウ) 雷山川は大きな下さ。

長野川を大きな下さにして下さ。 (コウ) 雷山川は大きな下さ。 (コウ) 雷山川は大きな下さ。

7751-2/15



雷山川
 平原
 三雲
 長野川
 甘原

大きな下さにして下さ。 (コウ)

651

1404
 第217図 雷山神籠石周回地図

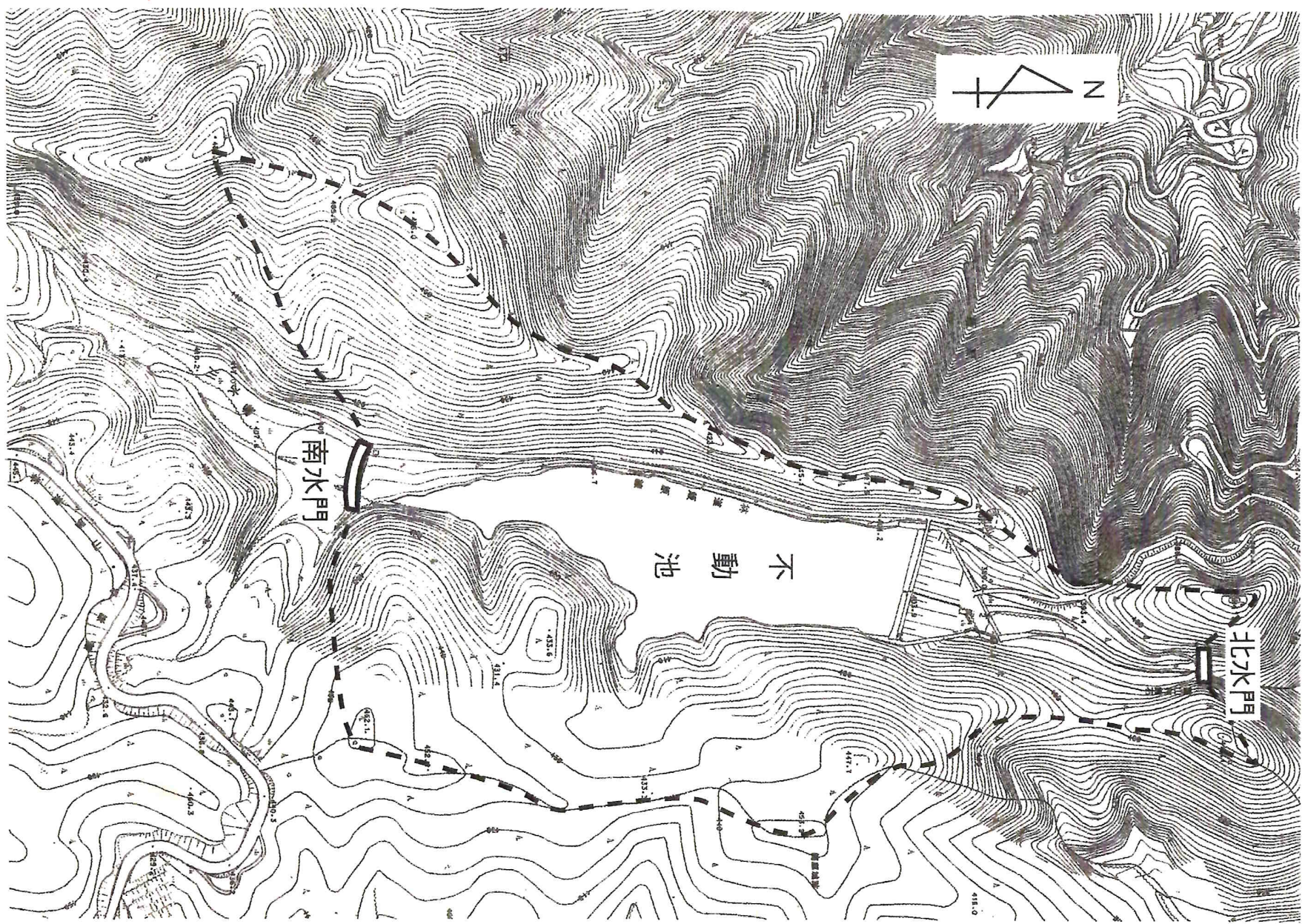
1304
 昭和42年、国土地理院発行の5万分之1地図「前原」「沢崎」参照。

新大ニ巻98*101図
 表例「小野川」61* 第13図

←雷山を太く4
 倍同との
 大きさにたいし、
 *赤い線を除去
 しておいた。

全圖に大水
左頁に載せし。

775P 3/15



652

④ 4.535P 4/7 鞠香城 石籠内塔の

1409 第218 図 雷山神籠石周辺地図 (拡大図)

『伊都国遺跡ガイドブック』系島新聞社、平成13年4月発行、24頁参照。

1304

- ・ カラー
- ・ 右頁の上半分に大きく載せて下さい。

775-4/15



写真図版 187 雷山神籠石の北水門

『伊都国遺跡ガイドブック』糸島新聞社、平成13年4月発行、口絵参照。

$$775^{\circ} - \frac{5}{15}$$

大生 ^お 道や川などに沿った所
お 来たので

④ 775^8
- $3/15$

北中腹、標高四〇〇の四ハ〇の程の所に築か
れており、二つの屋根に挟まれた緩やかな勾
配の天筋に、ひとつそりと往時の面影を残す。
この屋根は、雷山山系のなかでもとりわけ
北へ突き出ているので、糸島地方のみならず
博多湾や玄海灘まで広く一望できる。
遺構としては、谷の南北に設けられた水
門と、南北水門から両脇に派生する列石群と
がある。
南北水門は上流域の水を神龍石内へ導き入れ
る為の水門には、
(1) 列石の下部に構築された暗渠様式の水門跡
(2) 石壁の一部に水桶を形成し、そこから流入
させるようにした水門跡
があり、そして更に南水門一帯に、
(3) 水門跡らしい列石の切れ間が、二ヶ所見ら
れる。
北水門は、屋根先端の崖面上に位置し、花
崗岩の切り石を、長さ十二メートル、幅十
メートル、高さ三メートル積み上げた、強固な造りとなつて
いる。(第218)

高尾地区に
ライサンと有
ただし
地名集典
1659p.には
ライサン
雷山とある

ライサンという

↑
なから
上り 2斤上り
か

775P- 7/15

うれい
たて 高嶺

子孫

■なるほど、これらの神籠石の多くは、七世紀中葉の短期間に、相前後して築かれたのだらう。

■いかしなから、雷山神籠石は、

へ天日槍の子孫達によって、
 場合避難し、龍城を築き上げる為の

要塞として、倭国大乱（一四七—一八八年頃）以前に築造された。

と考えてみたい。

・ようするに、

へ天日槍の子孫「伊都国王達」が、一国の命運をかけて、雷山神籠石を築き上げた

のではなからうか？

と想察される。

■定かでないが、皆振山系の高峰から密かに

池を望見させ、
 へどんな仕掛けか隠されてゐるのだらうか？
 という疑心暗鬼の念を植え付けておきたか？
 たのであらう。

白村江大敗
775
4行

656

高所 775P- 14行 要塞

775P-15/ 7-8行

タコヨ ケー20 28x20 だう

面 775°-5 卡 27 水 27 世 25° 列石 規定 4
 17 25° 列石 面 775°/ 13 行
 較 列 落 2 頁 13 行
 (3) 前 2 頁 13 行

子の子孫らの軍勢に取囲まれ、切羽詰
 まった局面を想像してみよう。
 (1) 屋根の側方から敵軍が攀じ上り、来る場合
 に、は、列石を転がり落そうと企図した。
 (2) 山麓の木は、皆、切り倒さぬ、取り除かぬ
 ていた。
 (3) まず、手ごろな大きな石を〔屋根上の列石の間か
 突き落〕てみせれば、敵等は恐ろしく近づ
 こうとするまい。
 (4) それでも山腰の隆起部を襲んで這い登って
 くる者がいたら、弓矢・槍・剣などで威嚇し
 てやればよい。
 (5) 夜間には、照明の為に列石の外側の
 処々で「篝火」を燃え上がらせる必要がある。
 (6) 最後の決戦は、南水門あたりとなるに違いない。
 (7) 北方への脱出が困難な―――――背水の
 陣にも似た陣立てを行ない、決死の覚悟で
 の戦いを予想していた。
 という戦略がみてとれる。
 ともあれ、もしもそうなら、
 〆 雷山神籠石は、日本最古の朝鮮式山城で
 ある。

775^p - 9/15

更に 775^p - 5/15 行
4729^p - 1/2 (28)

といふことにならう。
神籠石の項に於いて、種々述べる。第八章
なお、白村江での大敗（六六三）後に築か
れたとみられる数多くの神籠石の項に於いて種々
の項に於いて種々述べる。第八章

(*)

天智天皇

「弥生時代」表巻 ⑤1534-15/
257P ⑥172% 175P-10/15

「伊都」時代の糸島
29P

ういざんが 419(2001) 伊都国 造跡がト 雷山神龍石
雷山 1.23(4)
川島子から石神洞に 22P 地名 雷山(村の名) 8
Tel 有った。(松原の山に) 112 98P

・そして、伊都国の中心地だった三雲におい

摩耶の御道具山古墳がある。
・この中には「発生期の古墳」とみられる旧志に比べても、かなりの密集度である。
・九州の他の地域がせいぜい二の基どまりであるの比べて、また、奈良・大阪の古墳群

糸島地方では、古墳時代に、約四の基の前
糸島地方の繁栄マター突然の終焉
方後円墳が築かれた。

金々 詳らかならなものの、
朝鮮半島から渡来した天日槍の子孫であ
る伊都国の王達が一箕子達との決戦有伊都国大戦
にやなえて、予め
雷山川上流域の朝鮮式山城 雷山神龍石
さ築いたのではなからうか

ト 1/7ハ
移し

ということ(は)事実である
突然前頁3行 27p (は)

775p-11/15

① 海軍時代
257p-28p
(ニ)

② 伊都国
遺跡が11
59p, 60p

てさえ、
降、端山・築山・茶臼塚の三古墳が築かれた。
・これだけ多くの前方後円墳が築かれたという(ことは)
へ糸島一帯が(倭人統治下にあっても)かなり
重要な位置を占めていた。✓
という状況を物語っているのだろう。(①)
二五七―八頁。②―五九―六〇頁参照。
ところ(が)何と、
「四世紀末から五世紀初めにかけの三雲
の集落群の住居址(が)で」とことごとく焼失した状態
で出土し、それ以後の遺物・遺構は(極端に)少な
くなるという現象がみられる。三雲で古墳が
営まれたのも四世紀終わりまでである。
三雲炎上(で)――ここまで言い切るのが適切
かどうかは問題だが、
糸生中期から繁栄を誇った三雲は、古墳
時代のある時、ついに終焉を迎えた。✓
といえようである。
その原因は、戦争か、災害か、あるいは故
意に村を焼き払って捨てたのか。遺物はそこ

419 (2007) 1.15.

「新室時代」270°

三雲は弥生中期後半

④437°12分

all!

④772°-7/10 16分

④772°-3/10 7分

239年

0

239年

41H

765°1/2

④769°-4/5

紀上260°

④769°-4/4

④775°-8/15分

定かでない

あえてはいる

232°

259°

775°-12/15

まで語ってはいれないし
という。は「日本の遺跡発掘物語」(4)弥生時
代、森浩一監修、社会思想社、二五九頁(塩
満温氏執筆部分)参照

古墳時代のその当時、国替えが断行され
近江国・若狭国を経て、荒道河をさかのぼ
形的に似ている。丹後半島の基部、出石山へ移
り住んだのではなからうか

と想像される。(重仁紀三年三月条の分注参
照。第八章へ天日槍伝説の項において既述)

塩満温氏は、
三雲南小路に葬られた伊都国王と「魏志
倭人伝」に登場する(後年の)伊都国王とは、時代的

に二〇〇年から二五〇年の開きがある。
三雲南小路の寶棺は弥生中期のものであり
その一、二号寶棺に副葬された錢の枚数は

平野南地域の弥生中期後半頃の貴族の三雲南小路墓と同時期か
遅れる程度の豪華な副葬品を伴う巨大な石の下に寶棺

コクテ-20 20X20 弥生時代 270° 246°

2と

775-13/15

田775-7
775

魏志倭人伝 47' 57

弥生中期

墓の約二倍に達している。
当時の伊都国王は並らびなき権勢を誇っていた
のであり、魏志倭人伝にみえるような
人女王国に服属し、一大率の監督を受け
た伊都国王の姿
とは、イメージが重ならない。
魏志倭人伝に描く世界は、倭国大乱（
四七）一八八年ころ後の弥生後期後半の日本
の様子だった。
弥生中期から後期へ、そして終末期へ。伊
都国は、その間に大きく変質したように見
受けられる。考古学的にも確かめられないだ
ろうか。
といった趣旨のことを述べている。「日本
の遺跡発掘物語」(4) 弥生時代、森浩一監修、
社会思想社、二五五頁（二四六―二七〇頁）
参照
重要な指摘だと思われる。

*

2と

OK

見受汁紙子 類 11~12 頁

⑦ 175^b-13/ 949 はい 五世紀初め

775^p - 14/15

魏大维 47⁰
同 01534-14 未

次頁
から

た。

(1) 天日槍の子孫連を、糸島半島基部から丹

(2) そこで口一大率山は、伊都国内に住む

天日槍の子孫等を厳重に監視する必要性が無

な

くならった。

(3) 倭国の朝廷は、口一大率山

と巨櫓の親王が補任されたのだろう

ハ和馬台国(肥後国)の真北に位置して交通

の便が良く、海北の国への玄関口」というバ

き」口北の奴国(博多付近)もトくは

その南の日太宰府にあたり、常駐させ

たのではなかろうか

(4) そうしたわけで、三雲地方では、四世紀末

から五世紀初めにかけてのころ以後、遺物や

遺構が極端に少なくなり、古墳も造られなくなっ

た。

令和元(2019)12.10(火)~12.12(4回)

17-12/11
12/11

775^P-15/15

魏大佐人伝 47^P 前頁 14
よう

と
い
う
経
緯
が
あ
っ
た
も
の
と
思
わ
れ
る
。

な
っ
た
。

日
一
大
率
は
大
宰
帥
と
呼
ば
れ
る
よ
う
に

(5) その後の時期の特定は困難ながら
いちだとして
大率
大宰帥
と
呼
ば
れ
る
よ
う
に

×

④71P ④204P ④133P ④「皇統譜」263
 ④2258P ④記(皇)134P ④1599P ④204P ④3463P
 ④272P

776P

殉死
 重仁二十八年(前二)十月五日「重仁天皇の
 同母弟曰倭彦命(倭日子命)が薨去され
 葬るに当り、始めて陵に人垣を
 立てた。トル(以下「重仁紀二
 十八年条。崇神記中の系譜へ「倭日子命」
 の注記参照)
 ところか重仁紀には、引き続いて、到底
 素直には納得し難い。誠に奇妙な文言が記
 載されている。
 倭彦命が死去されてから僅か「一个月後」
 の重仁二十八年十一月二日「天皇は」
 「其水」古の風と雖も、良からずは何ぞ
 従はむ。今より以後、議りて殉はむこと
 を止めよ。と詔し、殉死の慣わしを止めさせられたとい
 う。
 ・始めったばかりの殉死の風習を、太古

H30.1.17(金)~1.18(土) 令和元(2019)5.11(土)~5.11(日)
H30.12.11(火)~12.12(水) 同日 205
3473
紀下294

前2年
+後明印 530年 大元 せめて前頁6行, 205
532年 ものここの始まり

下5/11
%

(*)

の風 といふのは、明らかにおか
し。察するところ、次のように解すべき
であらうと思われ。
(1) 垂仁二十八年(前二)に殉死(陵に人垣を
立てる)こと(か)始まり(一)の古の
風は、いつ果てるとも知れず、続いていつ
た。こうして、五〇〇年程の歲月が流れ、垂
仁天皇に相当する欽明天皇の御世となつた
とき、天皇は(欽明天皇)は詔し、
「殉死の風習は、古の風」と雖も良くな
い。これからは、議つて殉死を止めよ
と仰せられた。
という次第なのだ(第一表参照)
もつとも、殉死の慣例は、それから以降も
更に長く続いていて、孝徳天皇
の大化二年(六四六)三月に、再び禁令が出た
の冒頭(たの)だ(た)。(荒筋)第三編

三つて せめから これから

(二)

察するところ 779-755

倭奴国わのなのくにの朝貢ちょうこう（西暦せいれき五十七年）
小林 491

後漢書ごかんしょは、後漢ごかん（二五〇の年）の時代だいの事跡じせきを記した史書である。

だが、その成立はかなり遅く、（二〇〇年以上）
遅く、南朝宋なんちょうそうの時代の人、范曄はんえつ（三九

八）四四五）により、四三二年頃完成した。

という。（「広辞苑」へ後漢書）。東洋史

辞典に創元新社へ後漢書。他参照）

後漢書ごかんしょには、倭奴国わのなのくにが二度にわた

て後漢の朝廷へ貢納した記録きらく（西暦五十七年お

よび一〇七年度の朝貢記事）が掲載され

ており、よく知られている。

しかし、後漢書の成立時期が、倭国大乱

（一四七）一八八頃）以降となったので、

倭奴国の朝貢についての記事が

甚だややこしくなっているように思われる。

■重複するが、いまいちど述べたように。

(1) 倭奴国が後漢へ朝貢した当時（西暦五十七年）

107年の朝貢 大正 1202 光武帝 1~3行 緯度57° 経度122° 580 583 113 671 192

魏志倭 58° 更ニ北ニ移ル 緯度48° 大正 1202 緯度57° 経度122° 580 583 113 671 192

賜 う に 印 綬 (印 章 と 印 の 紐 を 以 つ て す)	賀 す 。使 以 自 ら 大 夫 と 称 す 。 (倭 国 の 極 南 界 な り)	建 武 中 元 二 年 (五 七)	倭 奴 国 、 奉 貢 朝 貢 す 。	事 を 見 て み よ う 。	後 漢 書 倭 伝 の 建 武 中 元 二 年 (五 七)	の 記 き 。	と 考 え ら れ る 。	帯 の 支 配 権 を 箕 子 達 か ら 奪 い 取 つ た 。	(4) ようするに、倭奴国は、北九州・山口地方一	て勝利したのは、倭国だった。	(3) この倭国大乱(一四七十一ハ八頃)におい	が勃発した。	大なるものとなつてゆき、ついに倭国大乱	(2) ところがその後、倭奴国の力はいよいよ強	果(肥後国)にあった。	山口地方、朝鮮半島南端一帯の内の極南	箕子達が統治している日百余国(北九州・	および一〇七年当時、倭奴国は
--	---	--	--	--------------------------------------	--	------------------	---------------------------------	---	--------------------------	----------------	-------------------------	--------	---------------------	-------------------------	-------------	--------------------	---------------------	----------------

第2図はやめる。
57、107年当時にも、もっと大きくなつた。

光武帝
後漢の始祖

大元の大主

780^P

1か 366^P-5/23

タイル 5/27^P
580^P 123行

と記されている。(第六章へ東遷は何時頃
ったのか)の項。他におりて既述)

■ こう解釈してみたい。

(1)なるほど、倭国大乱(一四七―一八八頃)が終結

た後の後漢末(二二〇)の時点における倭

国は、北九州・山口地方・朝鮮半島南端部

一帯を領有する大きな国となっていた。(第2

四) 第一表の147年へ倭国大乱へおよび200

年へ狗邪韓国領有へ参照)

(2)倭国大乱が勃発する以前の建武中元二年(五

七)当時、倭国は小国にすぎなかった。

(3) ↑ ↑ ↑ 倭国は北九州・山口

地方・朝鮮半島南端部の極南界の地にかつ

て在った。ごく小さな国に倭国は、大夫

(周の職名。卿の下。士の上に位する者)を

使者として、後漢の朝廷へ遣わし、朝賀の礼

をとつた。(「広辞苑」へ大夫へ参照)

は、後漢初代の天子光武帝(在位二五―五七)



■ なお、後漢の光武帝(二五年即位し五七年

前反内何朝賀す

かろ

669

神功皇后

新 11-406^P 2行

H30(2018)1/17(金)〜18(4回)

IF

781^P

「漢の傳の奴國王」
の印。(金印) 次頁〜

教養50^P
なお 前頁26行

原文「後漢記」
OK

原文後漢書(一)50^P
上中史様書き

二月崩(ほう)は、この朝貢(ちょうこう)へ建武中元二年(五七)正月もーくは二月の朝貢(ちょうこう)直後(ちちご)の二月に崩(ほう)された^ということが分かる^と。後漢書(一)汲古書院、五〇頁へ後漢記(一)下三十一参照

また因みに述べると、後代(こうだい)のことながら魏志倭人伝(ぎしわじんでん)景初三年(二三九)十二月条に「金印紫綬(きんいんししきう)(金印と組紐(くみひも))を假(かり)し(与え)る」云々

とあるところから推(お)し量(はか)ると、後漢(こうかん)の光武帝(こうぶてい)から賜(たま)わった印(いん)も金印(きんいん)だったのだ¹⁹⁰⁻¹⁹⁴ろう、と想像(さくさう)される。但(たゞ)し、第(だい)一(いち)の図(ず)によると、金印(きんいん)のみならず銀印(ぎんいん)や銅印(どういん)も出土(しゅと)して

(*)

万葉集 522^P ~ 523^P

太ッ
ゴッ 782^P - 3/2

2365^p

(江戸時代以前には、今のようには、口でつながって、おらう、離島だった。
 博多湾、沖の志賀島で発見された金印。
 には、「漢委奴國王」と刻まれて、古来、さまざま
 議論が交わされてきた。
 ・「委奴王をヤマト(大和)」とするか、
 と読んで「怡土(伊都)」とするか、
 (那津)とするか、などなど、実にさまざま
 異説がある。(後述)
 追ってみてみる。
 にも、
 もちろん、
 現実のところは、
 漢委奴國王は、
 「漢の委奴王」
 の奴王(北の奴国でなくて、極南界の奴
 国)の王。
 という意味なのかも知れない。
 ①参考と述べる、
 百済、姉妹文貴將軍・州利郎爾將軍を遣
 使、
 意、
 楊爾を貢る。
 とある。

後漢書外口の
書物である

こと

大カク 363° 平カ 大カク 133° (まり直きこと)
周道 363° 後漢 133°
大カク 363° 平カ 大カク 133°
周道 363° 後漢 133°

大カク 363° 平カ 大カク 133°
周道 363° 後漢 133°
大カク 363° 平カ 大カク 133°
周道 363° 後漢 133°

こと

・つまり、日本書紀の編纂者は、委と

やまとのこととして記述している

② また、こんにち我々は、倭を「わ」とよみ

ならわしてあり、委を「い」とよんでいるが

「倭」も「委」も同じ発音であつたようであ

る。

「後漢の許慎の『説文』によれば、人に

从「従」の正字」ひ 委の聲、詩に曰く、

周道は大道 倭遲はまり遅いこと

「經典釋文」に「倭」とあり、更にまた唐の陸徳明の

とあるから、倭・委あいつうい、口 ぬと発

音さぬたらしい

という。(「岩波文庫」(四三七〇)和田清

石原道博、岩波書店、一五頁「大字典」上田万年

・すなわち、後漢当時、

と委とは、発音の異なる意味の上から

も「明確」に区別されることなく、全く同じよ

うな用いられたをしていた、と解される

外国の書物
百濟本記
引用しているにせよ

講談社 周道 倭 倭 倭

天つぎ
改行

光武は57年2月崩
⑦798P

783P-2/2

⑦781P-3/3 天つぎ
改行

「次に」由782P 7行
「次のよう」
⑦786P 19行

トル
のであらう。
トル
数多くの説があるとはいえ、
この物語では、以下のよう^いに考えた^い。

①建武中元二年（五七）は、日本書紀の^{きねん}紀年^{きねん}
による^よると、^{すい}垂仁朝^{ちうじん}（前二九^{せき}）後七〇^ごの後半^{ごはん}

に^{あた}当^{あた}る。第一表参照^{だい}

へ幾代^{いくだい}目^めかの垂仁^{すいじん}天皇^{てんかう}が、建武中元二年^{けんぶちゅうげん}
（五七）に、後漢^{ごかん}へ朝貢^{せうこん}の使者^{しや}を遣わ^{つか}された

のであらう。
と思^{おも}われ^れる。

②また、建武中元二年（五七）に、倭奴国^{わのなのくに}が

奉貢^{ほうこん}朝貢^{せうこん}の礼^{れい}をとったとき、後漢^{ごかん}の光武帝^{かうぶてい}は

倭奴国^{わのなのくに}の国王^{こおう}を^{かん}漢^{かん}の倭奴国王^{わのなのくに}と^し、それ

を証^{しょう}する^{ため}爲^{ため}に、
漢委奴国王^{かんわのくに}と^し、
周^{しゅう}の^{しゅう}倭奴国王^{わのなのくに}と^し、
出^だした^{きん}金印^{いん}（すなわち志賀島^{しかじま}から見^みい

と仮定^{かてい}してみたい。

*

以下、は、は、が多い。
魏志倭 57P
⑦781-2/3 同又

785P-1/2

「すてに」次頁2行
前頁中 范曄 398
范曄 (~445) ⑦781-1/3 = 188
147 ~ 188
⑦781-1/3
440
252

後漢書倭傳 58P

「倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、歴年主
無し。」
（「後漢書倭伝」参照）
という大乱（いわゆる倭国大乱）の世が続いた。
この戦乱に勝ち残り、霸権を握ったのは、
倭国であった。
■それから約二五〇年後の五世紀初めの頃と
なった時、范曄（三九八―四四五）によつて
後漢書がつくられていった。
■范曄は、後漢書執筆に当つて、後漢末を基
準矢に置き、――また、先に完成して
た魏志や魏略などを参考とした。
■范曄は、倭国からの朝貢について、こ
う記述した。
「建武中元二年、倭国、奉貢朝賀す。
使人自ら大夫と稱す。倭国の極南界なり。光
武賜うに印綬を以つてす」
●建武中元二年（五七）当時にはまだ「嚴密に
言え、
今日倭奴国は、箕子庫の白余国中の極南界
に位置してゐた」

785^{P-2/2}

④ 784^{P 115}
肥後北半
文字と文字との間の小点

ほっハX
北田
太カ
274^P

版図 名 1840^P
一國の領域

④ 781^{P-1/3}

というハキであらう。

しかし、後漢末（二二〇）^{④ 781^{P-1/3} 45}となった時には九州北^{④ 781^{P-1/3} 45}辺

および山口地方もすでに倭国^{④ 781^{P-1/3} 45}の版図に含まれ

ていたと想到される。

とすれば、

倭国（肥後地方）は、倭国（北九州）

山口地方の極南界に位置していた

といっても、あながち誤っているとは言えな

いわけである。

※

当時この頃 ころこの夏16何

域外の僻遠の地であつたろうと思われぬ。
（九州）の領有

■垂仁天皇に続いて倭国（九州）の大王となつた景行

天皇および成務天皇は、

「近つ淡海の志賀の高穴穂宮に坐して天の

下をお治めになつた」

という。（景行紀五十八年条・同六十年条。成

務記参照）

・おそろく景行天皇・成務天皇は、実は

琵琶湖北岸の志賀に地理的に相当す

る所、博多湾の北縁をなす志賀島に

の高穴穂宮に坐して天の下をお治めになつ

た

と解すべきなのであらう（第2・4図参照）

■倭国大乱直前のこの当時（景行朝末）

成務朝初期のころ、もしかしたら、

九州中央部（肥後国）に南の奴国に

があり、そしてその飛び地として九州北部

（志賀島あたり）に北の奴国があつたのか

も知れない。

●たぶん戦略的に、景行天皇および成務天皇は、時折り都を

遷し、居所をあらわしくしておられたのであらう。

南 2230

1995
- 57

11月 193
印後印平と印のひき
本35果へ云631

788 P-1/4

833 P-2/6 あり
懐 78 79
太いコ

833 P-2/6 あり
懐 78 79
太いコ

「ヒコ」が
781 P-2/3
789 P-6/6

833 同文
1855

H 30.1.28
0 廿八 日付付

ともあれ、**奴国**は、
南と北の両方から、
の国を圧迫していった。
と推察される。察せられる。
ところが、景行天皇もしくは成務天皇が博多
湾沖の志賀島の**高穴穗宮**に、
あるとき、**景行天皇**（一三〇）十一月七日、
總宮に於て崩御された時、
倭人達は慌てふためき、
山中や船着き場
を目指して逃げまどった。
印を持ち出した者が居た。
箕子達に奪われな
ように、**金印**は、
そのまま分からなくなつてしまつた。
というこたなのかも知れない。
やかて、**印綬**（印と紐）のうち、
果ててしまったに相違ない。
そして、**大石**は土の中に埋まつて
しまったようである。
従つて、その当時のままに、
千数百年もの
長きにわたる、
人知れず眠り続けたのであろうと思われ。

コクヨ ケー20 20×20 781-4/4

833 P-2/6 680

770
833 P-2/6

789P-3/6
から移した

1682
難無く

788P-2/4
セリノ出現
179P

1603 (年代書)
1868
265

ゆうきゆう 2244P
悠久 長く久しいこと

787P
と周回させ
ここに書かれて

小林行雄、文英堂、一七九一八頁、「日本の歴史」(1)日本のけい
まり、読売新聞社、一一三頁、志賀島の金印、岡本顕實、栄光印刷、他参照

ト
と思われ
なお、口志賀島は、通常「シカノシマ」
と呼ばれてゐるが、「シカノシマ」とも称さ
れるという。へ「帝国地名辞典」太田為三郎
名著出版、七五八頁参照
* 志賀島南西端の急傾斜地に金印
悠久の時が流れていった
江戸時代中期の天明四年(一七八四)二
月二十三日、筑前国那珂郡志賀島の叶の崎で
百姓の甚兵衛というものが、自分の田地の溝
の不具合を直してゐた。(以下「研究史 邪馬台国」
佐伯有清、吉川弘文館、三一頁「女王國の出現」
「まがりくねつてゐる溝を、まっすぐに直そ
う」と思ったたのだが、溝の岸に「やまな大
石が顔を見せてゐる。思いきつてその石を取
り除けることにした。鉄挺子を持ち出し、動
かしつてみると、石は二人持ちほどの大きさで
あつたにもかかわらず動き出した。こうして、
なんなくその石を溝からあげることかできた。
これによしと一息ついて、次の仕事にとり
かかうとした時、いま動かした大石の下に

430.1.28
婦人科

切り出した

頁へ水野祐「日本古代国家」参照
 家へ持ち帰った甚兵衛は、兄の喜兵衛に相談した。
 兄は「おれにまかせておけ」と言い、さう早く、
 その振り出しものを、以前奉公していたこ
 とのある福岡の豪商、米屋才蔵のところに持
 っで行った。さうして、まぎれもない純金で
 相当な値うちの品だということを確認めて帰
 ってきた。
 やがて米屋の主人は、二水をつぶして刀の
 飾りでも作らせたいから、私に売らないかと

また三個の石が並んでいて、その石の間に、
何やらキラリと光るものが見えた。
拾いあげ溝の水で洗ってみると、それは
文字を刻みつけた彫った金色の印判のよう
なものであつた。
もっとも、最近の研究によると、金印を発見
したのは、百姓甚兵衛の作男（雇われた男）秀治。
喜平の兩名であつたとみるのが正しいように
ある。

と川で研究
研究 邪馬台国に佐伯有清、吉川弘文館、三一

879-4/6
8行
18行
はこぼうかこ
竹箱状に囲んで
藤岡鉄 98

01430.1.28
 女第8回付

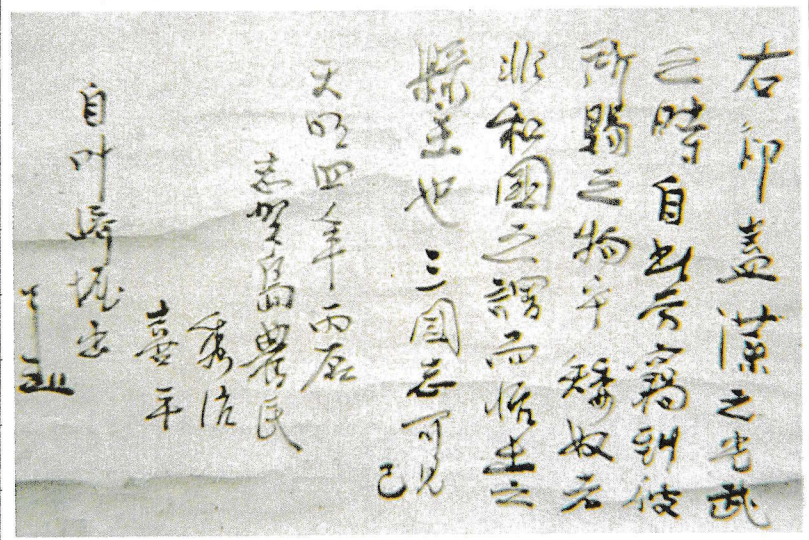
788^p-4/4

05 といふ前頁 105行
 お(お)和尚 禅宗でいう、「志賀島の金印」岡本顕實3^p
 日本社寺538^p 前頁15

参照

印刷(株) 三頁 同頁へ仙厓和尚の書幅の写真

と、いう。へ「志賀島の金印」岡本顕實、栄光
 (2) また、阿曇家(志賀海神社宮司)の古文書
 にも、農民秀治が掘り出した旨の一文がある
 と記されている。
 出た「志賀島農民、秀治・喜平、叶崎より掘り
 知られる仙厓和尚の書幅(文字を書いた掛物)に下
 (1) 当時の博多・聖福寺の住職で酒脱な禅画で
 因みに述べると、



〈図4〉博多の仙厓和尚の筆になる「志賀島小幡」。金印について触れ、最後の6行目から「天明4年／志賀島農民／秀治 喜平／叶崎より掘り出す」と書く。

1430.1.28
女市八代 改行

3118
高田・元1728 原本のうつし
・大田 244 元1744
289^P-1/9

13.50M
金印 天明年(1784)
2月23日
天明年(1784)

娘口の出現 180^P
天明年(1784)
前頁に持ち帰る
まいて

OK
地名集
1359^P

主の黒田家に買ひあげられた。藩の執政、浦
こうして、志賀島から出土した金印は、藩
郡奉行の津田源次郎のもとに差し出した。
庄屋の手を経て、福岡藩の那珂席田夜須御
組頭が連署した副書を添えて金印とともに
の覚書きを作った。そして庄屋のほか二人の
驚いた甚兵衛は、庄屋のいうがままに口上
ぐに奉行所へ差し出すかよい。す
りか、この私にまでも迷惑が及ぶだろう。す
ておいたら、おまえがおとがめを受けるばか
に奉行所へ差し出すかよい。す
は三月十日のことであった。
おまえが掘り出した品を、そのままに
の文字を読んで、それがきめて貴重なもの
だと言ひ出したためらしい。第219回 亀井南冥
庄屋の長谷川武蔵が甚兵衛を呼びつけたの
は三月十日のことであった。
おまえが掘り出した品を、そのままに

重要な人
で、
右翼の
上半分に
大きくはみ
出して、
掲載下
さい。

789^B-3/9



685

1300 1400 1500
1300 1400 1500
第219回 龜井南冥 (1743~1814)

『志賀島の金印』 岡本顯實、栄光印刷(株)、11頁参照。

江戸後期の傳學者、回医者、名は密、筑前の人。福岡藩西学問所の館長。所の館長。皇朝の祖先が漢の属国になるすがな。世をまどわすものだ。鑄つて武具の飾りにて「カ」ろ」といふ意。見がとひかう中、龜井南冥自身、100両を出して金印を買、取ろうとするなど身を挺して金印保護に動いた。怒力は特筆される。金印を

789^P-3/9

788^P-3/4 新後た、

788^P-3/4
12行

上教馬正昭のとりはからいで、甚兵衛は銀五
枚を賜わったとも、また、米若干俵を賜わ
ったとも伝えられてゐる（「女王国の出現
小林行雄、文英堂、一七九〇一八一頁。『日
本の歴史』(1) 日本のはじまり、読売新聞社、
一一三頁参照）

米